

カルカッタのカリ女神祭祀に見られる多様性

及びサンスクリット化とも近年の流行とも異なる儀礼について

澁谷俊樹(慶應義塾大学大学院)

カルカッタで最も著名なヒンドゥーの年中儀礼は、ドゥルガー女神祭祀(ドゥルガ・プジャ)であり、次に続く儀礼が、カーリー女神祭祀(カリ・プジャ)である。この他の神々も含め、年中儀礼に用いられる像は、カルカッタ各地の神像制作地(ポトゥアパラ)で作られ、トラックで市内外の仮設寺院(パンダル)へと運ばれる。パンダルは路上や広場などに仮設される。大部分の像が作られる場所は、北部のクモルトゥリと呼ばれる神像職人の集落である。2006年から毎年秋季の儀礼の間、クモルトゥリや、各地の仮設寺院を訪れてきた。その結果、人気の女神の像を中心に、様々な変異が見出されることが確認された。多くの神像の変異は、「サンスクリット化」と「近代化」によって特徴付けられる。しかしながら、カリ・プジャの間、チェトラ商人組合が組織する複数のコミュニティにおいて、これと相反する変化の傾向を示す仮設寺院が見出された。報告では、その「特異性」について明らかにする。

チェトラ商人組合は、1.5km程の区域に設置された、40以上の仮設寺院を組織する。それぞれのカリ女神は固有名詞を与えられ、組合が路地に設置した地図に、ベンガル語でその位置が示される。組合は、数ある年中儀礼のなかで、カリプジャの間のみ組織を現し、人々は自ら「チェトラのカリプジャはカルカッターである」と述べる。この「地区」を単位とした「アーバン・エスニシティ」は、「都市」を単位としたドゥルガプジャやジョゴダトリプジャと相違を示す。牙をむき出しにした、極端に恐ろしい形相のカリが幾つか祀られ、血の生贄を伴う仮設寺院が複数存在する。ところが、その仮設寺院には、「白いカーリー」という固有名詞を与えられた像を祀るものや、キリテッシュヨリ、ジョフラ・カリなどのあまり知られていないグラム・デボタ(村の神)を祀るものまで存在する。更には、ポンチョムンダ・カリなど、典拠が定かでない女神も含まれる。2009年度のカリプジャの間、主な儀礼を調査したのは、このポンチョムンダ・カリである。これまでに受けた指摘を含め、報告で示すのは、チェトラ商人組合のカリプジャが、どう特異であるかである。

特徴は実は、女神の像容や人々の「エスニシティ」だけではなく、地理的・歴史的・政治的な点にも及ぶ。有名なカーリーガート(カリガト)寺院は、カルカッタの名前の由来や、植民地都市形成の歴史に、深い関わりを持つことで知られる。カリガト寺院の西側には、「アディ・ゴンガ」(古いガンジス)と呼ばれる、16世紀までガンジスの本流であった水路が流れている。この水路に面するカリガト寺院の沐浴場の対岸が、チェトラ地区である。カルカッタの女神の年中儀礼に関して、今日、仮設寺院における血の犠牲はほとんど見られなくなったことが知られている。一方、普段から百頭前後の山羊が女神に捧げられることでも有名なカリガト寺院は、カリプジャの日に限って、女神を菜食のロッキ(ラクシュミー)として礼拝し、血の生贄を受け付けない。ところが同じ日の夜、水路を挟んで隣り合うチェトラの複数の仮設寺院に、西ベンガル各地のシャクタピータ(女神の聖地)からタントラ行者たちが訪れ、山羊の生贄が捧げられる。

よく知られるように、カルカッタは、初代インド総督ウォレン・ヘイスティングズの就任後1774年から1912年まで、英領インドの首都であった。カルカッタ市は141の地区に分けられ、総面積は187km²である。チェトラの面積は1.5km²ほどであり、その長方形の区域の西北に埋め込まれるように、ヘイスティングズの邸宅が佇む。敷地は現在は女子高である。ヘイスティングズは、「カースト社会論」、「創られた伝統」、「オリエンタリズム」を理解する上で、非常に重要な人物である。彼の「現地語優先政策」などの実施の結果、宗教・カースト間のコミユナルな関係が強化されることになったといわれる。また、彼の招きでカルカッタにアジア協会を創設した人物こそ、「オリエンタル・ジョーンズ」である。「知識の蓄積、なかんずく、われわれが征服によって支配を行使する人びととの社会的コミュニケーションによって得られる知識は、国にとって有益」(粟屋利江 2007: 4)というヘイスティングズの言葉は、人類学者にとっても意義深い。コミユナルな宗教・カースト間関係を強化したとされるヘイスティングズであるが、隣のチェトラの仮設寺院には現在、ヒンドゥーのカリプジャの折、ムスリムがパトロン兼支部長を務めるコミュニティが複数存在する。そのムスリムは、州政府の野党である「草の根会議派」のメンバーでもあるのである。

2009年度の調査の資料により、中心的には、各地の神像制作地や、カリプジャで見出された女神像の変異を、聞き取りに基いて分類し、「サンスクリット化」、「近代化」の文脈に位置づけることにより、こうした枠組みから外れるチェトラ商人組合のカリプジャの「特異性」を明らかにしたい。